

第 1 章

ハルハ河・ノモンハン戦争研究の成果と動向

2009 年以降を中心に

1. はじめに

モンゴルと満洲国との国境沿いのハルハ河でおきたハルハ河・ノモンハン戦争から 75 年たった 2014 年、モンゴル国とロシアではさまざまな記念行事やシンポジウムがおこなわれた。同年、日本でも同戦争を記念する学術シンポジウムが開催された¹。日本での学術会議は、研究者個人あるいは研究グループにより企画され、大学や民間財団の助成金をえて実施されたのだが、モンゴルとロシアでは、このような大学や民間団体により組織される学術会議のほかに、政府や軍関係の団体などにより主催される会議もあり²、同戦争はモンゴル・ロシア間の友好の象徴として記念されるという性格ももっている。これはこれまで日本でおこなわれたさまざまなハルハ河・ノモンハン戦争とかかわる会議にはない特色である。

ハルハ河・ノモンハン戦争に関する研究は、その終結後まもなく、その結果を検討し教訓を得る目的で開始されたが、当事者のいずれももっぱら自己弁護に終始し、歴史の真実に到達するのはむずかしかった。すでに知られているように、学界では、同戦争に関する研究を 2 つの段階にわけようになってきている。最初の段階は、同戦争終結後から 1989 年ないし 1991 年までの研究、すなわち冷戦時代の研究である。次の段階は、1989 年以降から今日までの研究である。ハルハ河・ノモンハン戦争研究

史において、1989年、ウランバートルとモスクワでおこなわれたシンポジウム、および1991年に東京でおこなわれたシンポジウムは、画期的な展開として、位置づけられている。

しかし、日本とモンゴル、ロシアの研究者たちとの間で協力関係が実現されつつある今日にいたっても、同戦争に関する各国の認識は食い違いが少なくない。国際的なコンテクストの視点からみると、これまでの研究は、伝統的な公式見解のくりかえしになることがおおく、解明されていない問題が未だおおく残されている。モンゴルでは、モンゴルの領土の保全や国家の独立を維持する上で、ハルハ河・ノモンハン戦争は重要な役割をはたしたとかがえ、ロシアでは「宣戦布告なき戦争」とみなしてきたが、日本では、同戦争を単なる「事件」あるいは「国境紛争」と解釈してきた。

1989年以前のモンゴルの同戦争に関する研究は、政治的イデオロギーにつつまれ、モ・ソ軍の功績と友誼に対する謳歌や、日本軍の侵略に対する批判が中心的テーマとなっていた。1989年以降、「歴史の見直し」にもなって、さまざまな秘密文書の利用が可能になり、モンゴルにおける同戦争の研究にも変化が生じ、飛躍的進展をみせた。G. ミャグマルサムボーなどにより指摘されているように、1980年代末から2009年までの同戦争に関するモンゴル国の研究では、戦争の遠因、当該地域の軍事・政治的状况、日ソ関係、日本の軍事政策、戦争にいたるまでのソ連の主導による暗殺と恐怖に満ちたモンゴル国内の政治状況、開戦および停戦までのプロセス、モンゴル人民軍がはたした役割、同戦争の教訓と遺産などをめぐる幅広い議論が積みかさねられた³。このような研究は日本のノモンハン研究にも影響をあたえている。そのもっとも代表的な例は田中克彦『ノモンハン戦争——モンゴルと満洲国』である。同書は、「戦史ではなく」、「同戦争の背後には何があったのか、どのような状況によって戦争にいたったか」を示そうとしたものである⁴。ロシアでは、時期にもよるが、1930年代の国際状況とりわけソ・モ、ソ日、ソ独関係や、スターリンの戦略、日本の思惑、ジューコフの「功」と「過」、ソ連軍およびその装備の試練、

武器弾薬の補給，ソ連軍のすぐれた情報戦，第2次世界大戦での位置づけなどがハルハ河・ノモンハン戦争の研究の対象になっている⁵。中国は、内モンゴル自治区フルンボイル市の西部地域が当時ハルハ河・ノモンハン戦争の戦場の一部となったため、当然、同戦争に関心をもっているが、その研究は、ソ連・モンゴル軍の戦いぶりや戦法、日本軍の「細菌戦」、戦争の要因・勝敗などに集中しており、民族や「国境」というデリケートな問題についての検討は慎重にあつかう傾向がみられる。

他方、2009年のハルハ河・ノモンハン戦争70周年をきっかけに、日本、モンゴル、ロシア、中国、アメリカに限らず、イギリス、ドイツ、韓国などの研究者も同戦争の研究にくわわるようになり、新たな動向があらわれた。

本章は、2009年以降のモンゴル、ロシア、中国におけるハルハ河・ノモンハン戦争に関する研究の成果を総括しながら、その問題点を批判的に指摘し、今後の新たな研究を展望したい。ただし、「2009年以降の研究」といっても、それ以前の研究と断絶があるわけではないので、むしろその継承・発展として理解していただきたい。

2. 2009年以降のモンゴルにおけるハルハ河・ノモンハン戦争研究

これまで、モンゴルにおけるハルハ河・ノモンハン戦争の研究について、日本では断片的に紹介されてきたが、その詳細については実のところ把握できていない。2009年以降のモンゴルにおける同戦争研究の全体像を理解するために、まず、同年以降、モンゴルでおこなわれたシンポジウムや出版された資料集、著述、アルバム、制作された映画などについてまとめておく。

2009年以降、モンゴルでは、次のようなハルハ河・ノモンハン戦争と関係する学術会議が実施された。(1) 第2回ウランバートル国際シンポジウム「世界史のなかのノモンハン事件（ハルハ河会戦）——過去を知り、

未来を語る」(渥美国際交流財団関口グローバル研究会 [SGRA], モンゴル国家文書管理総局, モンゴル科学アカデミー歴史研究所 [現歴史・考古学研究所, 以下同] 共催, 在モンゴル日本大使館, アメリカ大使館, ロシア大使館後援, モンゴル国防大学国防科学研究所軍事史研究センター, モンゴル国立大学歴史研究院, モンゴル・日本人材開発センター, 東京外国語大学協力, 国際交流基金 [日本], 霞山会 [日本], 守屋留学生交流協会 [日本], アラタニ財団 [アメリカ], ロシア財団 NGO [モンゴル], 未来人力研究院 [韓国], モンゴル・テレコム [モンゴル] 他協賛。ウランバートル, 2009 年 7 月 3～4 日)。(2) 国際シンポジウム「ハルハ河戦争——歴史と現状」(モンゴル国防大学国防科学研究所, モンゴル国境警備大学, モンゴル経営アカデミー他主催。ウランバートル, 2009 年 8 月 24 日～27 日)。(3) 国際シンポジウム「ハルハ河 (ノモンハン) 戦争の歴史——新資料と新研究」(モンゴル国防大学国防科学研究所, モンゴルの歴史と文化研究会共催。ウランバートル, 2012 年 11 月 7 日)。(4) 国際シンポジウム「ハルハ河 (ノモンハン) 戦争の歴史的研究——記録と戦場」(モンゴル国防大学国防科学研究所, モンゴル国境警備総局, ハルハ河戦争勝利記念博物館, ドルノド県ハルハ河郡共催, 守屋留学生交流協会他後援。モンゴル国ドルノド県ハルハ河郡, 2013 年 9 月 16～19 日)。(5) 第 7 回ウランバートル国際シンポジウム「総合研究——ハルハ河・ノモンハン戦争」(モンゴル国立大学モンゴル研究所, モンゴルの歴史と文化研究会共催, 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 [SGRA] 協賛, 在モンゴル日本大使館, モンゴル・日本人材開発センター, ハルスルド・モンゴル軍事史研究者連合会, モンゴル国立大学 Press Publishing 社後援。ウランバートル, 2014 年 8 月 9～10 日)。(6) 国際シンポジウム「ハルハ河 75」(モンゴル国防省, モンゴル国防大学国防科学研究所他主催。ウランバートル, 2014 年 8 月 22 日)。このうち, 「ハルハ河戦争——歴史と現状」, 「ハルハ河 (ノモンハン) 戦争の歴史的研究: 記録と戦場」, 「ハルハ河 75」はモンゴル国防省の提唱のもとで組織されたものであり, ほかのシンポジウムはいずれも日本の民間組織とモンゴルの研究団体などと共催したものである。

ハルハ河・ノモンハン戦争 70 周年にさいして、モンゴルでは『ハルハ河戦争歴史資料集』という記念文集が出版された。執筆者として、モンゴルの軍事、歴史研究者のほかに、中国における同分野の最も代表的な研究者であるハルビン市社会科学院ノモンハン戦争研究所の徐占江 (Xu Zhangjiang) と趙玉霞 (Zhao Yuxia) もくわえられている。同書には、モンゴルの研究者の論考のほかに、それまでのロシア、中国、日本、アメリカなどの国の研究成果も収録されている。さらに、中国の研究者の同戦争に対する認識が強調され、そのもっとも「重要な成果」として、次に述べる 731 部隊に対する記述がわりあたえられている⁶。

上記 2009 年のシンポジウム「ハルハ河戦争——歴史と現状」の成果として、同年、シンポジウムのタイトルと同名の論文集もウランバートルで出版されている⁷。収録された 18 本の論文のうち、モンゴルの研究者により書かれたものは 9 本であり、それ以外はロシア、中国、日本、アメリカの研究者により書かれたものである。また、同年出版された D. ゴンボスレンが書いた『モンゴル国軍事史——20 世紀』は、ハルハ河・ノモンハン戦争に力が注がれていて、氏の近年の同戦争に関する研究成果がまとめられている⁸。

L. チョローンバートルと B. サンダグが書いた『愛国者 Ch. シャーリーボー——宣誓に忠実で勇敢な英雄』は、1939 年 5 月末の山県支隊の侵攻を撃退し、東中佐の搜索隊を殲滅した戦役に参加したモンゴル第 6 騎兵師団の指揮官シャーリーボーをたたえるものであり、モンゴル国防中央文書館の貴重な資料を利用したものの、研究というより、英雄を「神話」化する伝記になっており、作戦の問題点などについての検討はかけており、日本語の文献により検証もなされていない⁹。実は、シャーリーボーは 5 月 28 日の戦闘ですでになくなっている。その後、同師団の各部隊を実際に指揮したのは L. ダンダル (1914～84 年) などであった。

戦勝記念として、モンゴルではさまざまなアルバムが刊行されてきた。2009 年には、モンゴル教育・文化・科学省とロシア連邦駐モンゴル大使

館、モンゴル科学アカデミー歴史研究所、ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル・チベット・仏教研究所が共同で『ハルハ河：1939』を出版した。同アルバムでは、ハルハ河・ノモンハン戦争におけるモ・ソ協力に重点がおかれているが、ウランバートルで開催された日モの団体の共催のシンポジウム「世界史のなかのノモンハン事件（ハルハ河会戦）——過去を知り、未来を語る」についても紹介している¹⁰。同年出版された Ch. チョローンバートル編集の『ハルハ河戦勝歴史的記念物』は、戦場となったドルノド県、および首都ウランバートルに建てられた博物館や記念碑などを紹介するアルバムである¹¹。ハルハ河・ノモンハン戦争勝利 75 周年の 2014 年にはさらに『第 2 次世界大戦におけるモンゴル——ハルハ河 I』が出版され、同戦争に関する複数のモンゴル国防中央文書館の資料のほかに、モンゴル・ソ連軍の英雄小伝や勲章の紹介なども網羅されている¹²。

このほか、民主化以降、モンゴル軍と関係する資料集も出版されてきたが、2011 年に出版された『モンゴルとロシアにおける軍事協力——資料集 II: 1936～46 年』は、ハルハ河・ノモンハン戦争と 1945 年 8 月の対日参戦の資料がおおく収録されている¹³。

うえで述べた 2013 年に開催された国際シンポジウム「ハルハ河（ノモンハン）戦争の歴史的研究——記録と戦場」の論文集も同年出版された。収録された 24 本の論文の内、モンゴル国の研究者の論文は 11 本であり、それ以外はロシア、中国、日本の研究者によるものである¹⁴。

2009 年以降のモンゴルにおけるハルハ河・ノモンハン戦争研究において、もっとも注目されているのは R. ボルドの研究といえよう。R. ボルドはモンゴルの気鋭の軍事史研究者であり、モンゴル国家安全保障評議会事務総長やモンゴル法務・内務省諜報局長などをつとめたことがあり、とりわけ駐アメリカ大使、駐オーストラリア大使をもつとめた経験によって、同戦争におけるアメリカの研究を把握することができ、モンゴルとロシアの基本資料をいかして、刺激的な論考を発表しつづけている。2014 年、

氏は近年の研究成果をまとめた重厚な力作『宣戦布告なき戦争』を出版している¹⁵。

歴史認識に対する国民教育において、映画は重要な役割をはたしている。モンゴルではハルハ河・ノモンハン戦争に関するおおくの芸術映画とドキュメンタリー映画が制作されてきた。2009年には、ドキュメンタリー映画“Зарлаагүй дайны нууцууд”（『宣戦布告なき戦争の秘密』、監督：T. チメド、Shastir Tankhim 社）がつくられた。映画は日本の靖国神社の映像からはじまっており、つづいて戦場となった内モンゴル・フルンボイル市シネ・バルガ左旗での取材が紹介されている。すなわち「内モンゴル人の声」も強調されており、これはそれまでのドキュメンタリー映画とことなる点の1つである。2014年に同戦争戦勝75周年を記念して放映されたさまざまなテレビ番組のなかで、Soyon geegerüülegch TV（啓蒙テレビ）作成のシリーズ・ドキュメンタリー番組“Тайхамшигт Үзмэрүүд-Халхын Гол 75 үзэсгэлэн”（『すばらしい展示——ハルハ河75展覧会』）は、モンゴル軍事博物館やジューコフ記念館などの展示物を中心に、歴史資料の紹介や参戦者・歴史研究者に対するインタビューなどもくわえ、モンゴル・ソ連軍の「聖なる戦い」を礼讃し、おおきな関心をよんだ。

2009年以降のモンゴルにおけるハルハ河・ノモンハン戦争の研究を俯瞰してもわかるように、あつかわれた主題や内容は多岐にわたり、得られた知見などもさまざまであり、新旧の観点の対立も生じている。ここでは、逐次分析しきれないので、注目すべき動向と問題点を管見の限りで、6項目にまとめたい。

第1に、ハルハ河・ノモンハン戦争の遠因と目的について。

このテーマは戦闘の終結直後から研究されてきた。よく知られているように、長い間、謎の「田中メモラドゥム（田中上奏文）」についての理解が、同戦争の遠因についての研究を大きく左右してきた。「田中メモラドゥム」が最初にモンゴル語に翻訳され、雑誌で刊行されたのは1932年である¹⁶。満洲国の成立ともかさなり、モンゴルでは日本の「侵略的野心」

を警戒するようになった。また、チョイバルサンはハルハ河・ノモンハン戦争中の1939年9月6日にウランバートルでおこなわれたモンゴル人民革命党の中央幹部会議で、同戦争の要因について次のように述べている。「第1に、わが国は豊かな資源をもっており、第2に、わが国は2500万の家畜をもっており、第3に、日本はわが国をソ連を攻撃するルートとみなしているからである」¹⁷。チョイバルサンのこの発言、とりわけその第3点は上記「田中メモランダム」とあわせて、ハルハ河・ノモンハン戦争の要因として、モンゴルでしばしばとりあげられてきた。

民主化以降、モンゴルでは、「田中メモランダム」の存在を否定する、あるいは疑うかんがえ方もあらわれている。たとえば、「この（ハルハ河・ノモンハン）戦争はあくまでも大国ソ連と日本が地政学的緊張により角逐した小さな戦場の1つにすぎず、（中略）モンゴルと満洲国の間では戦争をおこす意図はまったくなかった」とか¹⁸、あるいは日本側の目的は「ソ連の兵力を試すこと、中国に対するソ連の援助を阻止すること、日本の潜在的軍事力を同盟国のドイツとイタリアに誇示すること」であり、ソ連側の目的は「日本に厳しい教訓をあたえること、日本に2度とソ連とモンゴルに攻撃をしかけさせないこと、アジアでの戦争にまきこまれるのをふせぎ、アジア、ヨーロッパといった二正面における戦争をさけること」である¹⁹。ちなみに、「田中メモランダム」が実在すると主張する研究者のなかには、同文書のなかの「満蒙」の「蒙」は、「外モンゴルではなく、内モンゴルだ」と認識するものもある²⁰。

しかし、ハルハ河・ノモンハン戦争の要因に関するモンゴルの公式的見解は依然として、日本が「田中メモランダム」にもとづき、計画的におこなった戦争だとみなしている²¹。また、「田中メモランダム」が存在するかどうかとは別にして、日本の陸軍大臣荒木貞夫大将の1932年の「日本は、モンゴルのような曖昧な地域を持つ土地が自国の勢力圏と直接に国境を接することを望まない」などの発言²²を根拠に、日本はモンゴルを侵略する野望を持っていたと分析するものもある²³。あるいは1930年代、ド

イソ・イタリア・日本といった枢軸国とソ連との対立する構造が形成されるなか、ハルハ河・ノモンハン戦争は日本によるソ連に対する挑戦の1つだと主張する研究者も少なくない²⁴。

これに対し、これはあくまでも、当時、ソ連、モンゴルの指導者が、「日本の侵略」を防ぎ、ソ・モ関係を強化し、「反対勢力」をブラックリストにのせ、「人民の敵」「日本のスパイ」としてあつかい、肅清するための口実にすぎないとかんがえる者もいる²⁵。

「田中メモラドゥム」はまったく存在しないということは、日本では自明なことになっているが、モンゴルからみると、ハルハ河・ノモンハン戦争がおこった理由についての日本の研究者の論述は無力で、説得力がかけている。例えば、「国境をめぐる小競り合いが戦争へと発展したもの」とか²⁶、「日本人は他の国との国境をもっていなかったために国境線の認識が全くなかった。海の国境線と同様にかんがえハルハ河が国境線であると信じていた」とかいう、これらの説は、モンゴルの研究者にとっては、責任回避で、自慰的なものにすぎず、納得しがたい²⁷。当時、日本・満洲国側の主張では、外モンゴルの軍隊の越境により、満洲国軍が反撃し、このことが結局、戦争へと発展したとなっているので²⁸、「国境線の認識が全くなかった」ということは明らかに間違いである。小松原道太郎の日記にも「外モンゴル越境」により戦争へと発展したと記されている²⁹。

第2に、ハルハ河・ノモンハン戦争と国際関係についての研究。

これについては、2つの傾向がある。1つ目は、固い友情をもつモ・ソの関係を最優位とするものである³⁰。2つ目は、地政学の視点から出発し、ハルハ河・ノモンハン戦争と国際関係についての考察を、モ・ソ関係、日・ソ・モ・満・中関係を越えて、ヨーロッパ、アメリカでおきた出来事と結びつけるもので、次のような結論が導き出されている。すなわち、1939年9月1日のヒトラー・ドイツのポーランド侵攻をもって第2次世界大戦の始まりとする歴史記述の定説をみなおし、相互に関連した戦争の一環として認識すれば、ハルハ河・ノモンハン戦争は第2次世界大戦の

はじまりであったとされるのである³¹。また、ハルハ河・ノモンハン戦争の結果は、第2次世界大戦の舞台（戦場）をアジアからヨーロッパにうつさせ、日本の戦略をモンゴル・シベリアからアメリカ大陸にむかわせ、日本軍を真珠湾攻撃にふみきらせ、それによって、アメリカがソ連と同じ陣営にたつようになり、結局、第2次世界大戦の終結も実際、この1939年のハルハ河・ノモンハンでの戦いによってきめられたというかんがえである³²。

第3に、ハルハ河・ノモンハン戦争の光と影についての反省。

アルヴィン・D・クックスは、従来の研究はハルハ河・ノモンハン戦争におけるモンゴル軍の役割を過小評価したと指摘している。モンゴルでは、モンゴル語、ロシア語の新資料を駆使した、モンゴル軍の戦いを基軸とした検討がなされ、作戦地図（手書きの地図も含む）の研究も加え、各戦場で活躍したモンゴル軍の戦いぶりがより詳細にリアルにえがきだされている³³。また、歴史的人物の足跡をたどって考察した伝記研究も精力的におこなわれている³⁴。他方、ハルハ河・ノモンハン戦争の遺産として、モンゴルの独立や領土の保全が強調されてきたが、1989年以降には「負」の遺産も認識されるようになった。それは主にモンゴルにおける粛清や、1939年9月のモンゴル軍のヌムルグ川流域とマナ山（三角山）地域での戦いの実相、モンゴル第8騎兵師団第22連隊の指揮官の悲惨な運命、国境画定におけるモ・ソ交渉のプロセスなどの検討によるもので、モンゴルがマナ山地域をうしなったことや、戦争の悲惨さなど、すなわち「つらい歴史」が指摘されるようになったのである³⁵。

第4に、戦場となった地域の歴史・文化・住民およびその現状についての研究。

戦場となったハルハ河、フルンボイル地域の歴史、文化、住民、およびその現状についての論考があらわれたことは同研究のもう1つの特徴である。なかでも、同戦争に参加したフルンボイルのバルガ人に対する評価は特に興味深いものである。モンゴルの軍事史研究者 G. ミャグマルサン

ポーは、日本軍の指令でバルガ人が日本軍後方の兵站で重要な役割をはたしたことや、バルガの家畜が大量に徴収されたことなど、負担が増大したこと、かれらの日常生活が失われ、恐怖につつまれたことなどを強調している³⁶。また、バルガ人の Ts. トゥメンは、歴史文献とオーラル・ヒストリー調査の成果を根拠に、1939 年前後の満洲国軍のなかのバルガ人部隊の状況、およびバルガ人の生活や教育などについて考察し、ハルハ河・ノモンハン戦争に参加したバルガ人が当時のモンゴル人民共和国政府によるさまざまな誹謗中傷によって粛清されたことを指摘している³⁷。このほか、L. ミャグマルスレンの論文「ハルハ河戦争の歴史とかかわるいくつかの場所について」は、同戦争の遺跡を概観したうえで、これまで、関係諸国が同地域でおこなった調査・研究、記念事業をも紹介し、グローバル化のなかで、戦跡を保護することの重要性をうたっている³⁸。

第5に、アメリカにおけるハルハ河・ノモンハン戦争研究に対する注目。

モンゴルの外交官である R. ボルドは、アルヴィン・D・クックスやスチュアート・D・ゴールドマンなどアメリカの研究者が執筆したハルハ河・ノモンハン戦争についての論文 25 本を翻訳し、2013 年にウランバートルで出版した³⁹。これによって、アメリカにおけるハルハ河・ノモンハン戦争の研究状況がモンゴルで知られるようになった。うえでも述べた、2014 年に出版された、氏が近年ハルハ河・ノモンハン戦争に精力を傾注した集大成の単著『宣戦布告なき戦争』はモンゴル語、ロシア語などの資料にもとづいて、アメリカの研究者の成果をも利用し、モンゴルがおかれた国際状況や日本・ソ連の対モンゴル政策、戦争のきっかけを分析し、日本軍の総攻撃、ソ連・モンゴル軍の戦い、とりわけモンゴル軍の5月と9月の作戦の詳細などを綿密に検討し、双方の使用した武器の優劣、損耗状況をあらたに論じ、示唆にとみ、たいへん脚光をあびている⁴⁰。ハルハ河・ノモンハン戦争 70 周年以降にモンゴルで出版されたハルハ河・ノモンハン戦争にかかわる諸論考のなかで、同書は議論に深みがあり、他の追随をゆるさない。2015 年に氏はさらにロシア語で『独立と承認——三国の利

害関係のなかのモンゴル：アメリカ・ロシア・中国 1910～73 年』を出版し、1939 年にアメリカはハルハ河・ノモンハン戦争に注目したものの、関与はしなかったなどと指摘している⁴¹。

第 6 に、石井部隊に対する注目。

近年、モンゴルにおけるハルハ河・ノモンハン戦争研究が注目しているもう 1 つの問題点は、731 部隊（関東軍防疫給水部隊、部隊長石井四郎軍医大佐。以下「石井部隊」とする）と同戦争とのかかわりである。しかし、モンゴル側は主に、中国の研究成果を利用している。石井部隊が前線で浄水の搬送と負傷者の後送を積極的におこなったこと、8 月に細菌作戦を実施した（ハイラスタイ［ハイラースト、ハイラースティーン、ホルスタイ］河の上流に菌をまいた）が失敗に終わったことについては、すでに日本人の研究者によって明らかにされている⁴²。石井部隊の活動について、ロシア語資料（ハバロフスク裁判記録など）も残されており、ロシアの研究者によっても研究されている。しかし、モンゴルの研究者が根拠としているのは主に中国の研究者の論述である⁴³。石井部隊のハルハ河・ノモンハン戦争での給水活動はすでに岩城成幸氏等により解きあかされており、ここではくりかえさない。

3. ロシアにおけるハルハ河・ノモンハン戦争研究の成果と動向

モンゴルとおなじく、ロ・モ友好のしるしとして、ロシアでも定期的にハルハ河・ノモンハン戦争を記念するシンポジウムがおこなわれてきた。2009 年以降には次のような学術会議が開催された。(1) 国際シンポジウム「世界史と国際関係の中のハルハ河戦争（1939 年）——原因と結果」（イルクーツク、2009 年 6 月 17 日）。(2) 「世界史と国際関係におけるハルハ河の戦い」（サンクトペテルブルク、2009 年 6 月）。(3) 国際学術会議「ハルハ河 1939 年 世界史と国際関係：歴史・歴史学・概念」（イルクーツク、2014 年 5 月 23 日）。(4) ハルハ河戦争勝利 75 周年記念国際会議「国境沿いの協力——歴史的出来事と現状」（ロシア連邦ザバイカリエ地方国際協力・